

瓜生卓造

おおまち物語

瓜生卓造

おおまち物語

瓜生卓造（うりう たくぞう）

大正九年、東京に生まれる。昭和十八年、早稲田大学政経学部卒業。雑誌「文学者」、「早稲田文学」の編集委員を経て創作活動に入る。

△主要著書▽

『大雪原』（三笠書房）

『銀嶺に死す』（新潮社）

『八郎瀉』（講談社）

『谷川岳』（中央公論社）

『流水』（雪華社）

『札幌という街』（山と溪谷社）

『谷川岳鎮魂』（実業之日本社）

『知床の旅』（山と溪谷社）

『冬の旅』（山と溪谷社）

『間宮林蔵』（山と溪谷社）

おおまち物語

昭和五十一年二月十日初版発行

著者 瓜生卓造

発行者 川崎吉蔵

発行所 株式会社山と溪谷社

東京都港区芝大門一丁目一番三三号

郵便番号一〇五

電話東京（03）四三六―四〇二一

印刷 図書印刷株式会社

製本 株式会社明光社

定価はカバーに表示してあります

落丁・乱丁本は送料弊社負担にてお取り替えます。

0093-000038-8521

おおまち物語

瓜生卓造

山と溪谷社

装帧·井上敏雄

梅雨空のもとに白樺の白さが目に沁みる。風は落ちた。ライト・グリーンの梢はソヨとも騒がず、眼の下には大町の家並みが、モザイクのように眺められた。

信濃大町——山男の郷愁を誘う町である。対山館と、主の百瀬慎太郎と、アルプス夜明けの歴史が静かにねむる町、その街並みのうえに蓮華岳の姿が雄々しい。おおらかな曲線を描きながら、のびのびと安曇野に手足を伸ばしている。古人が蓮華のうてなになぞらえて命名した。

山々に目をやりながら、由利一彦はゆっくりと煙草をくゆらした。彼は今しがた勝山佐久衛と連れ立って、博物館の建つ丘へやってきた。勝山は大町の古い山案内人で、対山館の昔を知る数少ない現存者の一人である。

彼らが立つ丘は鷹狩山山腹のとある段丘で、標高七七六メートル。大町駅から高距わずか四二メートルだが、山の気がいちだんと爽かである。東京も雨、中央線も大糸線も雨、昨夜は昨夜で、強い雨が夜っぴて、大町の旅窓を叩いた。陰呑な空模様ながらも雨が上がって、一彦はほっと息

つく思いであった。空にもどこか明るさが感じられる。

「やっとあがったのかな」

一彦はかたわらの勝山をかえりみた。

「まだ降り足りない」

勝山は眉間に皺を寄せ、ひとりごとのように呟いた。細面のととのった顔立ちである。痩せぎす、やや撫で肩の身体が、一見花車にも見えるが、胸郭が厚く、腰がデンと座っている。七十を過ぎたと聞くと、身体にも顔にも老人くさはない。生涯を山の風雪に生き抜いて、大自然の試練と恩恵が身体のスミズミまで滲み透っている。当然、山の話題が豊富である。彼は道々大町の山と人について語ってくれた。

「百瀬さんはいい人だった」と、勝山は話の続きをはじめて、遠くを見つめる目なざしになった。「ずいぶんお世話になった。真面目で、思いやりのある人でナ。社交上手で……べつにお世辞いうわけじゃないけれど、相手の方から集ってきて……人徳というもんだろうネ。酒が好きだった。それもただ好きなんていうもんじゃない。帖場の机の前にすわって、うしろの四斗樽にはいつも手がかかっていた。人がきたといっちゃ呑む。一人だからといっちゃ呑む。朝の酒が昼に続き、昼の酒が夜から寢酒に続く。鏡抜いて、片口に移すんだけど、ゴボゴボという音が今も耳につ

いてるじ」

「歌にも文章にも酒のことがよくでてくるな。百瀬さんの酒の話はよそでもずいぶん聞きましたよ」

——^{はのみ}吸呑というのを初めて使いたりこれが酒ならば可笑しがるらむ——という一首を一彦は思い出した。歌は牧水門下で、素朴ななかに独特の格調のある作品を数多く残している。山の気と人間の香りが交錯する。一首は戦中胃潰瘍で仰臥中の苦吟であり、笑えぬユーモアが漂っている。「酒と山だネ。商売は二の次で、酒をホトホトにとか、旅館業に精を出せとか、ずいぶん忠告した人もあるようだけど、なあに聞くような人じゃなし、あの人にはあの人なりの生き方があって、それでよかったんだじ。東京の立派なダンナたちと友だちになって、死んでもみんなにしたわれて、あの人のこと悪くいうのきいたことないせ。正月松ノ内は米粒は一切食べない。ふだんでも、米は一カ月五合でいい、といって、肴も食べなかったネ。大町の料理屋じゃ、料理がつかないからもうけようがない、なんて裏話もあって……きつぶのいい人だな。オラたちにもパツパと吞ましてくれたし、苦勞した山登りにはガイド料のほかに自腹切ってチップを上乗せしてくれたりもした。百瀬さんのおかげで、オラたちもいい収入がもらえたし、東京のえらいダンナ衆と交際^{まじわ}ったり、土百姓も少しはリコウになったのかもしれないじ。酒も強かったけど、若い

ころは山も強かった。瘦型で、ダンナだから重荷は背負わなかったが、足は早い人だった。それに道を見つけるのがうまくってネ、黒部はとくに詳しかった」

おなじような話を、一彦は、昨年平林高吉からも聞いていた。いい人でな、ずいぶんお世話になった、酒が好きで、酒なしじゃ生きられない人だった、黒部に詳しくてな、道を見つける天才でな、と——平林は勝山よりもさらに二、三歳年長である。短軀で、両肩が岩のようにもりあがっている。山男らしい無骨な口をきくが、笑うと目もとが暖かい老人である。

百瀬が大町に登山案内者組合を結成したのは、大正六年六月のことで、日本最初のガイド組合として知られている。その前年に松本、大町間の鉄道が開通した。組合結成はまことにタイムリなものであった。発足当時の案内人は二十二名、五十五歳の伊藤菊十、五十四歳の大西又吉を筆頭に勝野玉作、伝刀林蔵、黒岩直吉などの名は、今も名ガイドとして語り継がれている。当時まだ十五、六歳だった平林高吉は、結成後二、三年してから、勝山は、さらに二、三年おくれて、組合入りをしたものであろう。

「ガイド登録されたのは、大正十二年……三年かな」と、勝山は話をついだ。「まだ鹿島にいたころだから、十九か二十だったろう」

鹿島とは、鹿島槍登山口の小さな部落の名である。平家の落人の伝説を秘め、今はやりの言葉

でいえば、秘境といえるだろうか。山合の狭い土地で、大勢が共存することは許されない。江戸の末期から世帯数は十一に限られていた。今も十一軒。分家は一切認められない。次男の勝山は、昭和に入るとすぐに大町に出て世帯を持った。

「ガイドになった動機は？」

一彦はいささか生硬なき方をした。

「動機というほどのこともないネ。鹿島生まれで山は庭みたいなもんだし、百姓よりいいゼニが取れたでナ……」

百瀬の残した記録によれば、ガイドの日当は一円十銭である。当時農家の日雇が九十銭だったことをみれば、重い荷を背負い、危険をおかして一円十銭は、そういう賃金とはいえない。やはり彼らは山登りが好きだったのであろう。おなじゼニ取るなら高いところの方がいい。それにいくばくかのプラスアルファもあったにちがいない。賃金外のお客の御祝儀、チップのたぐいである。

「ガイドはほとんどが鉄砲打ちの衆でな、オラ獺はやらなかったし、獺の衆とは山の登り方もちがって、はじめは苦勞も多かった。それにみんな四十、五十のオトツサマで、わしはまだ検査（兵隊）前の鼻たれ小僧、百瀬さんも十以上も年上だったろうな。オラなんか座敷に上がっても、

隅の方で小さくなってたもんサ。目の鋭い人だったじ。小さいときに子守のそそうから煮え湯かぶって、右目が見えなくなった。そのためか見える方の目が、人一倍光っててな。オミキがまわると、いっそうおつかなくなった。狛の衆たちは、片目だから山道もよく狙いが定まるズラなんて、かげ口叩いて……そうだけど、なんといってもアルプス登山の第一の功労者だし」

勝山の言葉どおり、百瀬がガイド組合を結成しなければ、日本登山の近代組織化はさらにおくれていたにちがいない。少なくとも大町には、近代登山発祥の歴史は刻まれなかった。人の為事は年が経ってみなければわからない。

「対山館には山の名士がゴマンときたわけだから、勝山さんもいろんな人を案内したでしょうネ」

「そう……いろんな人と登ったな。山登りの人はみんな親切で、腰が低くて、わしら案内人をデ―ジにしてくれた。変った人もいた。冠松次郎さんなんかも、ずいぶん変った山の登り方する人だったな。黒部に詳しくって、二、三度おとしたけど……、亡くなったそうだな。ダンナ、冠さんを知ってたかネ」

「いくどかお目にかかったけれども、親しくしてもらう機会はなかったですよ」

と、一彦は答えながら、冠松次郎の大きな丸い頭を思い出した。禿げていたのでよけい大きく

見えた。いつだったか、銀座のデパートの夏山コーナーで、若い登山者に、針ノ木周辺のルートを説明していた。歯切れのいい江戸弁で、大頭をふりふり、口角泡をとばす熱弁をふるっていた、もう七十も過ぎていたところである。彼も対山館の常連の一人であった。——からんころんと、大沢小屋の屋根で、玉をころがすような音がする。木の葉の音だ、山のささやきだ——といった短章が宿帖に残されている。「小商人、冠松次郎」のサインが見える。

「賑やかな登山だった。十人もときには二十人も仲間や手下を連れてきて、水があつて気が向くところになれば、昼ごろでも、もう天幕張ちまう。日程が楽だから、ガイドの衆はみんな喜んだもんせ。いついかに帰るといふ予定がない。ほんとうに山を楽しんだ人だな」

話していると四冊はふたたび暗さを増していった。

蓮華岳が薄墨色に沈むなかに、頂から沢筋にべつとりとつけた残雪が、山男を呼ぶ姿である。左に針ノ木のコルへ落ち込み、ふたたび隆起して、北葛岳を盛り上げ、続く七倉、不動は灰色の雲のなかに消え入る姿である。

右は鳴沢岳、岩小屋沢岳が遠くかすみ、爺ガ岳がアルペンの威容を見せるが、さらに続く鹿島槍、八峰、五竜、唐松、白馬三山の大バノラマは梅雨空のもとに没している。

上空の雲は北から南へゆっくり動いて、爺ガ岳を包んでいく。

「爺に雲がかかると、すぐに大町まで下りてくる」

勝山は山波に目をそそぎながらいった。

シルバーグレーのカーテンは、静かだが、休みなく動いて、爺ガ岳を包んでしまった。雨雲の緞帳は音もなく南に伸びていく。鳴沢から赤沢へ、そして蓮華の肩へと——見るまに乳色の山霧が掃くようにやってきた。緞帳に先がけて山をかくし、町並みを朧ろにしていくな。待つ間もなく、霧雨が白樺の梢を濡らしはじめた。その横で山桜の病葉が^{わがは}一ひら、静かに舞い落ちていった。

「しつっこい雨だな。いきますか」

と、一彦は勝山をうながした。

二人はゆっくりと軒下を歩き、古めかしい館の入口をくぐった。雨はいつしか大粒になり、軒から雨滴が落ちはじめていた。

一彦は大町にいくと、館を訪ねるのが恒例になっていた。日本では数少ない「山岳」の名がつく博物館である。木造二階建、もとの大町中学の建物で明治三十六年の建築という。一彦も昭和初頭のころ、場所こそちがえ、こんな古めかしい建物で英語や代数を学んだ。彼には遠い少年時代が思い出されて懐しかった。

彼は館を訪れるたびごとに、展示室を見て歩く。半纏、袴、腰布団など、昔のガイドの装束、

品右衛門、嘉門次、喜作らの遺品のかずかず、古代スキの複製品、民具、発掘品等々。そしてカモシカ園をのぞき、雷鳥を見、日本猿をからかい、事務所で館の人々と山の話など交わすのが常であつた。館長以下五人、小ぢんまりした職場である。いくども訪ねて、すっかり顔なじみになつてしまつた。

ことに動物園は興味深いものがあつた。生きものだけに、いくたびごとに変化が見られる。先月訪れたときは、迷子のカモシカが保護されていた。体重五・五キロ、メス、推定生後四十日、名はチビ。辰野町郊外で郵便配達夫に見送られた。道路脇の草むらで、声もなくうずくまっていた。報せを受けて、学芸員の茨木裕一が現地に急行した。しばらく物かげから親の出現を待ったが、期待は空しかった。肌寒い霧雨が降りしきっていた。赤子の衰弱が心配になり、やむなく連れ帰つて哺育した、という。チビは毛布に包まれ、辰野横川峡からやつてきた。先日は箱の中で、短い尻尾を丸め、目をしばたたいてうずくまっていた。あれからひと月、チビも園の生活に慣れ、元氣な姿を見せるにちがいない――

事務所のドアを開けようとすると、作業服姿の茨木が顔を出した。

「ちょうどチビの哺乳の時間です」

と、笑いかけてきた。小ぶとりの身体に、眼鏡の奥の目が柔和である。

「見ていいですか」

「どうぞ、どうぞ」

勝山はカモシカは見あきてもいるのだろう。事務所のなかに消えていった。

一彦は傘をさし、茨木と肩をならべてカモシカ園の方へ歩いていった。背後の傾斜地を利用して広い金網がめぐらされている。彼らは沢筋や岩場を庭とし、一頭の生活圏が約五ヘクタールと老大である。狭い檻では生きていけない。柵内の傾斜は急で、登っていけば、すぐに息が切れそうに見える。カモシカには急坂がつきもののようなのだ。園の上空には、コメツガや、ヤマザクラ、コナラ、ウリカエデなど、雑多な木々が大きく枝をひろげて、雨もかからない。緑が濡れて、したたるような鮮かさである。

歩きながら一彦は茨木の説明に耳をかたむけた。カモシカは牛科の一種族である。牛や羊と同類だが、同じカモシカにも、朝鮮、スマトラ、アフリカ、日本等々、種類が多い。痩せぎす、筋肉質で、アベベを思わす精悍さを誇るのは、アフリカ種で、日本産は、同種のうちで一番縁遠く、真性牛に近い、という。一彦はずっと以前に槍沢でカモシカを見た。筋張った精悍な姿を想像していたところ、大きなマリのような身体で森林帯に転げこむのを見て、駭いたことがある。茨木の話で疑問がとけた。現在博物館には十二頭のカモシカが飼育されている。九頭が成獣で、チビ

を交じえて三頭が赤子である。

とつづきの檻には、大助とあつ子の夫婦が仲睦まじい日々を送る。大助は八年前に赤子で保護された。チビとおなじに親にはぐれ、草むらのなかに息もたえだえの姿であった。発見場所は小泉郡真田町郊外、上田市の東北方で、菅平の奥山である。

あつ子は四年前の春に、梓川べりで成獣で保護された。足を痛めて満足に歩けず、栄養失調の状態にあった。推定八、九歳、姉女房であるにちがいない。

あつ子は餌筒にさしたウリカエデの若芽を一心に食いちぎっている。大助は金網に倚って空虚な目なごしを茨木に向ける。茨木の手から哺乳瓶で育てられ、茨木が親にも見えるのであろうか。動物特有の淋しい目を注ぐ。薄い栗毛の体毛が雨に濡れ、背中あたりで、五本、十本とかたまっている。

七、八人の作業衣姿の男女が、坂道を下りてきた。園の清掃に当たる人々で、雨のなかをのんびりと歩いている。昼食の時間であろう。

口々に気ままなことをいっては笑いかけてくる。茨木も屈託のない笑いをかえす。どこかユーモラスな彼は、誰からも親しみを持たれているにちがいない。

傘をさすものもあれば、かまわずに濡れていくものもある。

「今日の雨はおかしな雨だな。降ってるところ、降ってないところがある。オマンとこは降ってニヤアーか」

茨木は頭髪を濡らして歩いていく中年女に話しかけた。

「オラんとこ降ってねえじ。茨木さんとこは雨か」

女は前歯を出して笑った。

「うん、オラんとこは降ってる」

茨木は真顔でいって、傘をまわして見せた。

人々はまた笑いながら過ぎていく。

「茨木さん、またコンボコのとこけ」

ずぶ濡れの中年女がふり向いた。コンボコとは赤子のことである。

ゆるい坂道を登り詰めて、茨木は右手の金網につく南京錠を開けた。

ブロック小屋からチビが走り出してきた。いきなり茨木にまわりつき、小さな蹄で跳ねながら、ズボンにからみ、黒い鼻面を押しつける。

「よしよし、よし、よし」

茨木はいくども頭を叩いた。叩かれるたびに、鼻面をこすって甘えかかる。一彦には見向きも